

厳念寺だより

お盆号／令和元(2019)年



題字 大塚婉嬢 書

画 松田義夫

お盆号／令和元(2019)年

● 厳念寺事業報告

● 現在のお寺の建物は昭和最後の年(昭和六十三年)の年末に完成し、約三十年を経ました。外壁部分の劣化にともない、この五月から一連の外装工事を行っております。お盆前には修繕工事が完了して、皆様をお迎えできるかと存じます。

● 昨年に引き続き、**仏教入門講座「ケネス・タナカの仏教教室Ⅲ」(毎月連続八回)**が四月より始まりました。内容も新たに、**ケネス先生(武蔵野大学名誉教授)**がユーモアたっぷりの生活に生きる仏教をお話くださっています(テーマは「ユーモアを通して学ぶ仏教とその実践」)。お陰様で、お檀家以外からも幅広い参加者が集い(約八十名)、昨年以上に大変活気のある楽しい学びの場となっております。なお、昨年の講義内容は『ケネス・タナカの仏教教室Ⅱ』として一冊の本になっております。ご希望の方はお申し出ください。

● 三月二十一日(春のお彼岸のお中日)には、上智大学のグリーンフ・ケアグループの皆さんによる『オバラさんの老いじたくカフェ』(行政書士の先生によるよろず相談室)、『ORIZURUカフェ』等多彩な催しを実施し盛況でした(お盆にも開催予定/七月十三日)。そして、いくつかの自主学習会・映画上映会・社会福祉関連(ガールスカウト/保護司会/地域の老人会等)の場としてもお寺を活用していただいております。詳しくは厳念寺の公式サイトをご覧ください。[\(https://www.gonnenji.com/\)](https://www.gonnenji.com/)



● ドキュメンタリー映画「トレス・ジョイアス」上映会

日時 七月二十一日(日)午後二時～五時
講師 菅生健太郎先生(映画監督/南米開教使)
参加費 1000円(南米での活動支援としてカンパ)

日本からブラジルへ、日本人移民と共に仏教が海を渡って約百年が経とうとしています。その南米社会の中で、輝きを放つ仏教が近年育っています。仏教徒が全人口の1%にも満たない異国の地ブラジルで、仏教はどのような道を歩もうとしているのか。本映画はその軌跡を追ったドキュメンタリー映画です。

当日は、現地で仏教を伝える僧侶(開教使)として長く活躍されている**菅尾健太郎監督**をお招きし、本編を鑑賞。その後、菅尾監督から作品の解説や制作への思い、完成までの道のりなどを詳しくお聞きいただけます。

これからの日本において、仏教にはどのような可能性があるのか、どんなことが必要なのか、興味深いヒントを与えていただけるばかりでなく、「仏教」というものに豊かで新鮮なイメージをもたらしてくれるのではないかと思います。

ご参加される方はお気軽にお申し込みください。

※「トレス・ジョイアス」とはポルトガル語で「三つの宝」を意味します。仏教では「三宝」といって、**仏**(悟りを完成した者)・**法**(教え)・**僧**(その教えを求める仲間)を大切にしている伝統があります。



● お盆のご案内

東京のお盆は、七月十三日(土)から十六日(火)までの四日間です。どうぞ皆さんでいっしょにお参りください。また、八月の旧お盆期間中(八月十三日～十六日)にもご参詣ください。

七月十三日(土)には、ひばりが丘墓苑での墓前読経をうけたまわります。ご希望の方はお早めにお寺までご連絡ください。

「新盆法要(昨年の七月以降にお亡くなりになった方のためのお参り/別紙参照)」は七月十四日(日)の午前十一時より本堂でおつとめいたします。ご希望の方は、お早めにお電話などでお寺までお知らせ下さい。(電話〇三(三三四)九三八三)

● 七月十三日(土) 十時～四時まで、昨年来の好評につき、お寺の二階客間にて、グリーンフ・ケア・グループ「ORIZURU」の皆さんによる「ORIZURUカフェ」が開催されます。折り紙のワークショップやアロマ・マッサージ、ブレンドハーブティなど、ゆっくりと過ごしていただけます。どうぞお気軽にお越しください。なお、今回の「オバラさんの老いじたくカフェ」は予約制です。(別紙チラシ参照)

「お盆」という一年の折り返しの節目を私たちにとって大切なひと時にいたしましょう。なお、お墓参りの際には本堂の阿弥陀仏(ご本尊)にも必ずお参りください。

● 「ケネス・タナカの仏教教室」の講演録を厳念寺のホームページ上にPDFファイルで公開しました。一昨年、昨年、また今年の講座の講演録をご覧いただけます。厳念寺のホームページ(<https://www.gonnenji.com/>)の「講演録」をクリックすると読むことができますので、是非ご一読ください。



合掌

厳念寺

〒111-0042 東京都台東区寿1-11-2
<http://www.gonnenji.com>

電話：03-3844-9383 FAX：03-3844-9393
E-mail：gonnenji1253@gmail.com

蓮と仏教

蓮華

初夏を迎えると、上野の不忍池には鮮やかな緑の絨毯のように、活き活きとした蓮の葉が心地よい風に揺れながら群れ広がっています。そして、間もなく池のあちこちに開く蓮の花の大輪を楽しみむことができるようになります。

厳念寺の建物の正面には大きな金色に輝く蓮の華のマークがありますが、これは韓国の新羅時代の有名なお寺の瓦の紋様を模写したものです。日本でも、蓮は奈良の有名なお寺の瓦のデザインとして好んで取り入れられていますし、お寺の本堂内の壁面やふすま等にもしばしば描かれているのをご覧になったことがあるでしょう。

蓮は日本ではお葬式の時などに登場する花の代表のように扱われて、一般的にはあまり注目されている花とは言えないかも知れませんが、インドでは昔からめでたい素敵な花として、例えば結婚式などにも用いられているそうです。日本では「サクワ」の花のような存在でしょうか。

中で苦しみ悩んでいる所にこそ、**仏教の智慧に触れることがあれば**、逆境や苦難への向かい合い方が転じて、それが原動力となり、人間として本当の満足と安心を見出せる生き方がようやく見開かれて来るのですよというわけでしょう。

青色青光

また**舍利弗**、**極楽国土**には、**七宝の池**あり。**八功德水**その中に**充滿**せり。(中略)
池の中の**蓮華**、**大き**さ車輪のごとし。**青**き色には**青**き光、**黄**なる色には**黄**なる光、**赤**き色には**赤**き光、**白**き色には**白**き光あり。**微妙香**潔なり。**舍利弗**、**極楽国土**には、**かくのごとき**の**功德莊嚴**を**成満**せり。

これは浄土真宗で一番読まれている『阿彌陀經』というお経の中で説かれている、阿彌陀仏の国―極楽浄土の様子を描写した一節です。ここにも蓮が登場します。お釈迦様が智慧第一の仏弟子・舍利弗に向かつて「極楽というところには七つの宝でできた池があり・・・その池の中には車輪のように大きな蓮華の花が咲いている。その花は青い種類のもは青い色に輝き、黄色い種類のもは黄色い色に輝き・・・」と述べています。字面だけの意味を見る限り、何の変哲もない当たり前のことのように思えます。

極楽浄土に咲く大きな蓮華の花は「青

そして、蓮は仏教のシンボルマークとしても古くから用いられてきました。なぜなら、蓮は泥の中に生きながら、撥水性が高いので、その汚れや濁りに影響されることなく成長し、美しい花を咲かせ、確実に実を結びます。そして仏教の教えも、この世の現実生活の苦惱(泥)の中で、汚れた泥に染まることなく、腐ることなく、むしろそれを成長への栄養分として、苦惱から解放されて、困難を乗り越えて実を結んでゆけるような生き方を成就するための教えです。それにもっともふさわしい「蓮」が選ばれたのでしょうか。つまり、蓮はそういう意味で、最高に優れたもののシンボルとして取り上げられているのです。

例えば、日本に伝わって来たお経の中で、最も有名なものが「**法華經**」です。その正式名称は「**妙法蓮華經**」といい、元のインドでの名称は「**白い蓮の花のように最も優れた正しい教え**」といえます。つまり、素晴らしい優れていることの代名詞が「蓮」なのです。

また、仏像の下の方をよく見ると、「蓮華座」といって蓮の花の形をした台座の上に座っていたり立っていたりするスタイルを取っています。これも、その仏さまが「蓮華」の属性に象徴されるような仏教の教えを基礎にしていますよということを表現するために創造された形なのです。

今回は、浄土真宗で取り上げられている青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり」とは、いったいどういうことでしょうか。「青い花が青く咲くことなんて当たり前じゃないか。何でこんなことをわざわざ書いてあるのだろうか?」と、私は最初は思っていました。

ところがどうでしょう。私たち自身の生き様を見つめ直して、こんな表現が生み出されてくる背景を考えた時、私自身のあり方が本当に「青い花が青く光っている・・・」と言えるでしょうか。青い花なのにどんな青さかも知らずに、赤くなってみたりと望んだり、白くなってみようかと無理してみたり・・・青い花が青い光を放って咲くということは、私たちが一番忘れてしまっていることかも知れません。私たちは自分自身の〈内〉に備わっている想像以上の潜在力や可能性の豊かさに気がつかないままに、「ああなれば良いのにな。これさえあればきつと幸せだろうに・・・」というように、自身の〈外〉の方向に心の眼は向いてばかりいないでしょうか。

このように一見何でもないようなお経の一節ですが、**私たち自身のあり方・生き方で抜け落ちていかな問題**を照らし出そうとしている**仏さまからの呼びかけ**へ**メッセージ**のような表現なのだと思います。

仏教は、自分の好みや都合に合わせて、青いものを赤くしたり、白くしたりするよ

「蓮」の一節を二つばかりご紹介してみましたと思います。

淤泥華

「淤泥華」というのは、蓮の花の別名です。「汚れている泥沼の中に咲いている花」という意味です。『維摩經』には次のような言葉があります。

高原の陸地には、**蓮華**を生ぜず。**卑湿の淤泥**に、**乃此の華**を生ずるが如し。

(涼しく気候の良い快適な高原には蓮華は生育しません。じめじめして汚れた泥の中に、蓮華は生育するのです)

「**高原の陸地**」というのは、例えば、夏に涼しく快適な軽井沢のような、環境の整った心地良い、思い通りになるような条件に恵まれている生活のことを表しています。一見、それならば良さそうなものですが、そういうところでは、かえって本当の満足や幸せに気づきにくいということがあります。

親鸞聖人は『維摩經』にあるこの経文を引いてきて、更に付け加えます。私たちはいつの間にか**名誉・地位・財産**というようなことにとらわれ過ぎて、振り回され、傷つけ傷つけられたりを繰り返しているような迷いの世界(「淤泥」の中)におちいつている。しかし、そういう

うなマジック(魔法)ではありません。それは自分の外側にある物事を変えていくことよって解決を求めていく方法(救われ方)です。そういう解決の仕方も当然あるでしょうし、そういう面での救い(解決)を強調している宗教も少なからずあるかも知れません。

しかし仏教の場合は、自分の外側に関わる問題以前に、**自分自身の物事への受け取り方に焦点を当てて、自分の側(内面)にある問題が変わること(転識得智)**によつて解決が見出されてくるような教えなのです(それで仏教のことを「内観道」とも言われています)。そのような方向に促す道筋をいろいろな譬喩や表現や物語を用いながら私たちに語りかけているのです。

お盆の厳念寺へのお参りの帰り、思い立ったら上野の不忍池の蓮池にちよつと足を伸ばしてみませんか? もしかすると何か新鮮な気づき(インスピレーション)が湧いてくるかも知れません。

